



# 中高生とともに差別と闘う

## 「遊び感覚で広がる差別言葉」

吉成タダシ



### サッカー部の家庭訪問走

この夏、二十年前のサッカー部員たちと同窓会をしました。みんな三十歳も半ばとなり、それぞれいい歳をしたおじさんとなっていました。

時計店、銀行員、農業、バスの運転手、介護士、様々な仕事をしているようで、なかには、私には遠くてよく分からないのですが、平塚市に「アッシュ×エム」というレストランがあるのでしょうか？そこでシエフをしているという者もいて（当日は来られなかったようですが）、何だか神奈川という地を身近に感じたりしました。

案の定、昔話に花が咲き、中には耳の痛いことも、今だから明かせることも様々でした。その中で、「家庭訪問走ってあったよな」「あー、あったあった！ やったやった！」と、そこそこ笑顔がはじけました。練習の一環として持久力をつけさせたい。が、同じ場所をグルグル走るのも芸がない。変化をもたせて、楽しみながら走らせたい。そこで考えたのが、「家庭訪問走」でした。文字通り、部員の家まで走り、帰ってくるものです。家の近い部員もいれば、遠い部員もいます。毎回ジャンケンで行き先が決まるのですが、いづれにしても校区内ですので、遠くてもなんとかなる範囲であり、友達の家に行くので、それなりに楽しめるというものでした。「でも、何故に家庭訪問？」ですよね。私なりに意味はもっていました。

皆さんは、友人すべての家を訪れたことがあるでしょうか？ 振り返ってみると私は、行ったことのある友人もいれば、「そういえば行ったことないな」というか、家どこだっけ？」と思ってしまう友人もいます。子どもの頃の記憶ですので当時にはありませんが、それでも、行き来した友人がいる一方で、行ったことのない友人がいたことは確かでした。何故かは分かりません。でも今、教員という仕事をしていて思うのは、部屋に入る家もあれば、部屋がなくて入りようがない、そもそも家に入ることすらできない、という家があることも事実です。それぞれの家庭状況の違いです。それは一軒家かもしれないし、マンションかもしれないし、借家かもしれないし、施設かもしれない。善し悪しは別として、結果として、行けない「家」があるということです。でも、そこで友人は確実に生活している。そんな生活も含め互いに知り合ったうえで、一つのチームになってほしい。そんな思いがありました。友人は、その本人だけを対象としての友人ではなく、友人の生い立ちや共に生活する家族もすべて含めて、友人なのだと感じてほしかったのです。

気がつけば、そんな二十年前も昔の話で、三十歳半ばのおじさんたちに語っていました。

### 仲間との出会いが人を変える

それを象徴するような生徒の話を一つ。

サッカー選手を志して関東の強豪校に進学したタクという生徒がいました。運動能力もボールコントロールもずば抜けた能力の持ち主でした。タクは地区出身の生徒だったのですが、頭の中はサッカーでいっぱい。部落問題学習はなかなか彼には届きませんでした。

強豪校に入学して一年。久しぶりに里帰りをしたとき、彼は部落問題学習の必要性について、力強く語りかけてきたのです。「えっ？ どうして？」と問うと、「サッカー部の同期に在日の仲間がいる。なぜかすごく気が合い、遠くから親元離れて一人暮らしをしている自分にやさしく接してくれ、度々家に招かれては食事をごちそうになり、よくしてもらっている。そしてそのとき、在日として生まれてきたこと、在日として生きていること、これからも在日として生きていくことについて、家族の生き様も含めて話を聞かせてもらった。それが、自分の生い立ちや両親の生き様と重なり、「自分も自分の問題に向き合わなければ、向き合って生きよう」と思えるようになった」というのです。「やっぱり、身近な仲間の存在は大きいものなんだな」と思わせられました。タクが自身のアイデンティティと向き合うきっかけを与えてくれた在日の仲間感謝です。

### 「遊び感覚で広がる差別言葉」

さてさて、話をもとに戻しましょう。地元紙に投稿した高校生たち。

何の反応もありませんでしたが、それでも友の会として、「黙っていないかった」「自分たちなりにアクションを起こした」と思えたようでした。そして、あらためて身近にある問題に目を向け、学び直しをすることができたという点では、意義があったのだと思います。

余談ですが、投稿した女の子には、後日新聞社から、投稿の謝礼として図書カードが送られてきたとか。

高校生友の会での一幕についても一つ。これは、常々気になっていた私からの問題提起なのですが、「キチガイ」という言葉についてです。

この言葉、我が子もそうですし、中学生の会話の中にもたまに登場してきます。それがあまりにも軽々しく、「あほ」とか「ばか」のように使われていることに、一瞬、「えっ？」と戸惑ってしまうのですが、そんな私の気持ちをよそに、その場の会話は流れていくことがあります。「どうなってるの？」という疑問を友の会のメンバーにぶつけてみたのですが、予想通りの反応が返ってきました。「あほ」「ばか」に近い感覚で使っている。急に人と違ったことをしている友達に対して使っている。ネット上では、より頻繁に使われている。若者だけでなく大人も使っている。そして話は、相模原市の障害者施設殺傷事件にまで及びました。

(次回「なぜなと渚と」)